

シリーズ・いま、世界の子どもの本は？

第4回

第二部

ドイツの子どもの本の現場から (要旨)

平成23年4月23日

講師：那須田淳

ドイツに暮らして

御紹介いただきました那須田淳です。18年ほどドイツに住んでいます。92年にミュンヘン国際児童図書館の奨学研究者としてドイツへ行き、93年からドイツで暮らし始め、95年からベルリンに行きました。

僕はヤングアダルトを主に書いている作家です。ヤングアダルト文学というのはいわゆる青春文学だと僕は思っています。ヤングアダルトはアメリカでの図書館学上の呼び方でしょう。若い大人というより、思春期文学というほうがしっくりきます。ドイツには『トニオ・クレイガー』や『車輪の下』という伝統的な青春文学のジャンルがあります。僕はこれに加えて、世紀末ユーゲントシュティール文学のホフマンスタール (Hugo von Hofmannsthal) という詩人が好きで、そういうものを勉強したくてドイツに行きました。

90年にベルリンの壁が開いてから、ドイツはいろいろと変化しました。僕がドイツへ行ったときはテレックスの時代でしたが、間もなくファクシミリが導入され、それから2年ほどでEメールの時代が始まりました。それでドイツにいながら日本で作品を発表し続けることができたのだと思います。

『ちいさなちいさな王様』

ドイツで生活し始めて、作家として何を書こうかと考えていたとき、書店の美術書コーナーで、王様が新聞紙の上でふんぞり返って威張っているという本に出会いました。読むと、主人公のサラリーマンのところに小さな王様がやって来て、という話でした。これはファンタジーなのか、絵本なのか、寓話なのか、いろいろと考えました。かわいいだけでなく、いろいろなものが入っていて、大人にとっての子ども性、子どもにとっての大人感が書かれた作品でした。そして、この本を何とか日本に紹介したいと思い、それが『ちいさなちいさな王様』(アクセル・ハッケ作、ミヒャエル・ゾーヴァ絵、那須田淳・木本栄共訳、講談社、1996年)になりました。

日本のヤングアダルト文学をドイツに発信するために

ドイツに住み始めて、日本の作品がほとんど入っていないと感じました。先進諸国で言われる問題点には大きな差がなくなっていると感じますが、ドイツの場合、戦争やナチスの問題が重たい位置にあり、日本とは少し違います。そういう文学の違いを見付けつつ、僕自身もドイツのいろいろな作品を見ながら、日本の作品をドイツへ、さらに世界に発信するにはどうしたらよいか、ずっと考え、常に悩んできました。

大きな転換期を迎えたのは、2001年のフランクフルトブックフェアに行ったときでした。いろいろな編集者に、日本のヤングアダルトやジュニア小説は面白いのか、と聞かれました。ドイツでは当時マンガがヒットしていて、マンガがあんなに面白いのなら日本のヤングアダルトやジュニア小説も面白いのではないかと彼らが思ったらしいのです。僕は、マンガもヤングアダルトもジュニア小説も含めて、日本の児童文学の根っこは同じではないかと思っていますので、当然こちらでも受け入れられる要素があると思っていました。多分、編集者や先見の明のある人だったら、もっといろいろ考えて動いたのですが、僕は書き手ですから、紹介をするというより、自ら面白い日本のヤングアダルト作品をしっかりと書かなければいけないと思い、自分の創作活動のほうを優先しました。それで、『ペーターという名のオオカミ』（那須田淳作、小峰書店、2003年）や『一億百万光年先に住むウサギ』（那須田淳作、理論社、2006年）といった作品を書いたのです。

その上で、こういう作品をドイツの人に読んでもらうにはどうしたらいいのだろうかと改めて考えはじめたときでした。ちょうど2009年、2010年頃に、日本ペンクラブで「子どもの本委員会」を立ち上げるという話があり、野上暁さんやひこ・田中さんも、どうやって世界へ発信できるか悩んでいるということが分かりました。それでみんなで何かできないだろうか、と日本ペンクラブで「Ist Manga Literatur? (マンガは文学?)」というイベントを企画し、僕と野上暁さん、森絵都さん、令丈ヒロ子さん、角野栄子さんといった方々が一緒に実現させました。今日はこの話を中心にしたと思います。

ドイツで紹介されている日本の作品、紹介したい作品

- 『夏の庭：The Friend』（湯本香樹実作、福武書店、1992年）
- 『精霊の守り人』（上橋菜穂子作、偕成社、1996年）

これらは、ドイツで紹介されている数少ない本です。90年代後半、2000年くらいから村上春樹の本も売れたのですが、それ以上のものが行かないのです。うまく紹介されていないのではないかと思います。

- 『少年のころ』（ミヒャエル・ゾーヴァ絵、那須田淳文、小峰書店、2005年）
- 『一億百万光年先に住むウサギ』（那須田淳作、理論社、2006年）
- 『ペーターという名のオオカミ』（那須田淳作、小峰書店、2003年）

これは僕の作品です。

- 『リズム』（森絵都作、講談社、1991年）
- 『宇宙のみなしご』（森絵都作、講談社、1994年）

- 『アーモンド入りチョコレートのワルツ』(森絵都作、講談社、1996年)
- 『つきのふね』(森絵都作、講談社、1998年)
- 『ゴールド・フィッシュ』(森絵都作、講談社、1991年)
- 『カラフル』(森絵都作、理論社、1998年)
- 『DIVE!! 1~4』(森絵都作、講談社、2000年~2002年)
- 『風に舞いあがるビニールシート』(森絵都作、文藝春秋、2006年)
- 『メニメニハート』(令丈ヒロ子作、講談社、2009年)
- 『レンアイ@委員プリティになりたい』(令丈ヒロ子作、小笠原朋子画、理論社、2003年)
- 『あなたに贈る物語：講談社青い鳥文庫スペシャル短編集』(石崎洋司、令丈ヒロ子、楠木誠一郎、はやねかおる、シニッカ・ノボラ、ティーナ・ノボラ、あさのあつこ、松原秀行作、講談社、2006年)
- 『ダイエットパンチ! 1~3』(令丈ヒロ子作、ポプラ社、2006年~2008年)
- 「若おかみ」シリーズ(令丈ヒロ子作、講談社)
- 『子ども・大人』(野上暁、ひこ・田中文、ヨシタケシンスケ絵、大月書店、2009年)
- 『魔女の宅急便』(角野栄子作、林朋子画、福音館書店、1985年)

このような作品を持って行きたいというのが、今回の目的でした。もちろんもっとたくさん優れた作品がありますが…。

日本ペンクラブイベント「Ist Manga Literatur? (マンガは文学?)」

このイベントは3月17日と18日でしたが、3月11日に東日本大震災が起き、開催すべきかどうか悩みました。結果的には、ここで作家や子どもの本の関係者がこういうものを伝えることが日本を励ますことになるのではないかという思いが強かったので、決行しました。

イベントの初日は「魔女の宅急便」の上映と質疑応答。二日目は、手塚治虫の実験アニメの上映と、野上暁さんによる講演、さらに森絵都さん、令丈ヒロ子さんに加わってもらって、子どもとマンガの関係をテーマに討論しました。野上暁さんは、「日本のマンガは、戦後、子どもたちに希望を伝えようというところを根底に始まった、それについては児童文学も同じなのだ」というメッセージを伝えました。かなり質疑応答があり、非常に反響がありました。また、イベント直後には、シュピーゲル (Der Spiegel) というドイツの有名なオピニオン雑誌が、インターネットのニュースで『魔女の宅急便』について、こういう状況の中で日本人はキキによって救われるであろう、と暖かく書いてくれました。また、タツ (Taz) という新聞も、キキの笑顔によって人々は安心感と励ましを得るのではないかという記事を載せました。

ドイツの子どもの本の現状：作家の意見

このイベントで、ザビーネ・ルートヴィヒ (Sabine Ludwig) さんというドイツ人の作家に、ドイツの視点で話を聞きました。ドイツでは、子どもの本は非常に活気付いているが

、同一化してきているのでは、ということでした。ピンクとブルーの本は女の子の本、茶色と黒は男の子向きの本だと思えばよい、と言われました。

日本では、ヤングアダルトは14歳から18歳くらいまでを意識しているのかなと思います。ドイツでは、10代の中高校生くらい向けに書かれているのはユーゲントリテラチュア (Jugendliteratur) で、ヤングアダルトは16歳以上の一般の人や若い女性を読者としているのではないかというのが、彼女の個人的な意見でした。ヤングアダルトとは何かというのは日本でも同じように難しく、どのように評価していいのかわからないのですが、いろいろな人たちの意見を聞きながら、僕は日本ペンクラブの中で調査を始めました。

- **Die schrecklichsten Mütter der Welt / Sabine Ludwig. Hamburg: C. Dressler, 2009.**
- **Hilfe, ich hab meine Lehrerin geschrumpft / Sabine Ludwig. Hamburg: C. Dressler, 2006.**
- **Dir Nacht, in der Mr. Singh verschwand / Sabine Ludwig. Hamburg: C. Dressler, 2004.**

これは彼女の作品です。日本ではまだ翻訳されていませんが、ドイツでは中堅クラスで、人気のある作家さんです。

ドイツのマンガの現状

このイベント後、マンガの実情を見るため、ライプツィヒに行きました。ライプツィヒのブックフェアは、マンガも扱うフェアとして世界でも有名です。ヨーロッパのブックフェアでは、マンガと児童文学の会場が一緒になっているのが特徴です。コスプレをしている人がたくさんいました。僕は文学とマンガにどのようにアプローチができるのだろうと考え、マンガの原作となった児童文学を紹介することを含めて、幾つかアプローチしてきました。

ドイツの子どもに人気のある本

フェアの会場では本の販売もしています。子どもの本の関係者に意識してほしいのは、ドイツにおいて本は、中学生以下の子どもたちにとってはほぼプレゼントグッズであり、大体保護者と一緒に買いに行くものだということです。

- **Prinzessin Lillifee, die kleine Ballerina / Burkhard Nuppeney, Monika Finsterbusch. Münster: Coppenrath, 2007.** (邦訳『プリンセス・リリーの小さなバレリーナ』ブルクハルト・ヌッペイ話, モニカ・フィンスターブッシュ絵, 栗栖カイ訳、ブロンズ新社、2007年)

こういう本があります。

- **CHIARA: Wunsch des Herzens / Agnes Kottmann. Münster: Coppenrath, 2008.**
- **CHIARA: Eine Frage der Vertrauens / Agnes Kottmann. Münster: Coppenrath, 2010.**
- **CHIARA: Am Ende siegt die Liebe / Agnes Kottmann. Münster: Coppenrath, 2010.**
(上記3作はいずれも表紙に馬が描かれている。) 馬はドイツ人の女の子にとって忠実な

ボーイフレンドを意味するそうです。日本では、初めての恋愛対象のイメージが馬というのは難しいと思います。ドイツでは、馬に乗ることができる環境があるということでしょう。これが、今ではドラキュラに変わってきています。

ポケモンも、もちろん人気があります。これはアニマニア (Animania) という、10万部くらい売れている日本のマンガ・アニメの月刊誌です。僕らはここに何とか子どもの本を紹介してもらいたい、また、彼らと一緒にいろいろと新しいことをしたい、と思っています。

『カラフル』上映の反響

その後、(ベルリンの) ドイツ歴史博物館で、森絵都さんの作品を原作とする映画『カラフル』が上映されました。満席で、かなり反響がありました。後で10代の子どもたちに聞いたら、森さんの『カラフル』はとても素直に受け取ることができたと共感していたので、多分、このようなヤングアダルトも日本から発信できるのではないかと思います。

ミュンヘン国際児童図書館

ミュンヘン国際児童図書館 (Internationale Jugendbibliothek München) で、ヤングアダルトの専門研究員にドイツの状況を聞きました。ドイツでは、シリアスなものとはファンタジーなもの、この二つの大きな流れの中にあり、歴史的なものも見直そうとしています。少女の生活を書くものや逆に戦争や犯罪を書くもの、若者の悩みを描くもの、要するに本当に多様なレパートリーがあります。もちろん、ファンタジー系エンターテインメントは売れています。ドイツでは文学、言わば難しい話は少数でもいいから出したい、文学賞などにうまく入ってくるとよいのだが、という話でした。

- *Leute, die Liebe Schockt* / Alexa Hennig von Lange. München: cbt, 2009.
- *Weggesperrt* / Grit Poppe. Hamburg: C. Dressler, 2009.
- *Zusammen allein: Roman* / Karin Bruder. München: Dt. Taschenbuch-Verl., 2010.
- *Mano: der Junge, der nicht wusset, wo er war* / Anja Tuckermann. München: Hanser, 2008.
- *Und im zweifel für dich selbst: Roman* / Elizabeth Rank. Berlin: Suhrkamp, 2010.
- *Rotkäppchen muss weinen: Roman* / Beate Teresa Hanika. Frankfurt, M.: S.Fischer, 2009.
- *Mein innerer Elvis* / Jana Scheerer. Frankfurt, M.: Schöffing, 2010.
- *I love you: I[love]U: I don't love you. Lyrik und Lyrics* / Alexa Hennig von Lange. Weinheim;Basel: Beltz&Gelberg, 2009.
- *Such dir was aus, aber beeil dich!: Kindsein in zehn Kapiteln* / Nadia Budde. Frankfurt,M.: S.Fischer, 2009.

こういうものも出版されています。

ドイツ児童文学賞

ミュンヘン国際児童図書館の館員の一人が今年のドイツ児童文学賞の審査員だったので、現状を聞きました。ドイツ児童文学賞は、毎年ライプツィヒのブックフェアでノミネートされ、半年かけて審査が行われ、フランクフルトのブックフェアで大賞が選ばれる、一年くらいかけて選考されるドイツで最大の文学賞です。ポスターは例年、前年度の絵本部門の大賞受賞者の画家が描くようです。昨年度一年にドイツで出版された、翻訳を含む全部の本が対象になります。部門は、**Bilderbuch**（ビルダーブーフ：絵本）、**Kinderbuch**（キンダーブーフ：子どもの本／児童書）、**Jugendbuch**（ユージェントブーフ：ヤングアダルト、ジュニア小説）、**Sachbuch**（ザッハブーフ：ノンフィクション）があります。

特徴的なのが、青少年審査員たちがヤングアダルト、**Jugendbuch**（ユージェントブーフ）をもう一作品、青少年審査員賞（**Preis der Jugendjury**）として選ぶことです。ドイツ国内で読書会運動をしている子どもたちが全部で6チームくらいあり、それぞれのチームが吟味して候補作を6冊選ぶそうです。この6チームからそれぞれ二人ずつ選ばれ、12人が審査をし、最終的な賞を選びます。子どもたちが選んだ本は圧倒的に売れるそうです。子どもたちの目が若者のニーズに合っているのではないかと思います。

ヤングアダルト文学の現状

ドイツにおいてヤングアダルトは非常に注目されています。例えば、IBBY（国際児童図書評議会）のドイツ支部で、ドイツ児童文学賞の審査をしている児童図書館評議会（**Arbeitskreis für Jugendliteratur**）は、昨年くらいからヤングアダルト作家に奨学金を出しています。ドイツ児童文学賞のヤングアダルト部門に選ばれた、あるいはノミネートされた作家の中から選ばれた作家に、一人年間12,000ユーロが支給され、自由に本を書いてよいそうです。お金はドイツ文学者協会が出しています。これから彼らがどういうものを書いていくのか、ドイツ人はとても注目しています。そして、文学者たちが一般文学の中でヤングアダルトや子どもの本を見つめ始めているのも、一つの大きな流れだそうです。

ドイツで一番注目されている本

- **Liebe geht durch alle Zeiten / Kerstin Gier.**

Teil 1., Rubinrot. Würzburg: Arena, 2009.

Teil 2., Saphirblau. Würzburg: Arena, 2010.

Teil 3., Smaragdgrün. Würzburg: Arena, 2010.

図書館の後に、書店へ行きました。これは、今ドイツで一番注目されている本です。この作品の新しさは、ドイツの作品の中でも文体が画期的なことにあると思います。ドイツでは、割としっかり内容が書かれ、次に会話が来るとい、オーソドックスな文体がメジャーですが、この作品は会話で行動描写をしていき、日本の今のタッチに近いので、文学的にも注目しています。これは、日本でもかなり行けるのではないかと思います。

駆け足でしたが、ドイツの今を紹介させていただきました。これからドイツにどのように

話を持っていくかは、今回いろいろな調査ができましたので、一つずつクリアしていきたい
と思います。可能性はかなり見えているのではないかと思います。今やっておかないと、電
子書籍の時代になったら後回しになってしまいそうなので、これから数年の間に、世界文学
の中で日本の児童文学、ヤングアダルトをもう一回考えていきたいと思います。

どうもありがとうございました。